

第2号様式 別紙2(第13条関係)

「キクタニギクの栽培技術の開発と利活用に関する基盤研究」

京都府立大学 生命環境科学研究所

教授 増村 威宏

1.事業概要

京都・東山の菊渓、菊渓(菊谷)川を名称の起源にする「キクタニギク(アワコガネギク)」は、京都ゆかりの「野菊」であるが、現地では野生絶滅している。「都の福菊」では、京都をテーマにした観賞用のキクとして、また食材や加工品の原材料として「キクタニギク」を利用する目的で、観光資源化して地域活性化に貢献する活動を行っている。本事業では、キクタニギクを観賞用の花として活用する場面を拡大するために、現行では10月中旬～の開花期間を重陽の節句(9月9日)が行われる9月初旬より前に早めるため、短日処理栽培法の開発を行った。

2.事業実績

都の福菊は、前年度育成したキクタニギクの株から株分けした苗を京都府立大学および京都府立桂高等学校へ移送した。栽培管理は京都府立大学および京都府立桂高等学校の施設を使用して行った。研究代表者の増村と研究協力者の佐藤が栽培管理を指導した。5月末まで育成し、摘心して1株あたり3～4本の側枝に調整した。比較として未処理区(0w)を設けた。短日処理(8L-16D)は6月初旬から、恒温室内に遮光区を設置しておこなった。処理期間は2区設け(2w, 4w)、各処理区複数個体を用いた。短日処理後は、自然日長下で栽培した。熱が籠もらないように栽培中は冷却するなどした。栽培中に蕾の形成を調査した。短日処理区4wでは8月1日に開花が見られ、8月中旬に花のピークがあり、8月29日に終了した。一方、短日処理区2wと未処理区0wでは早期開花は見られず、全ての区で11月5日に開花が見られた。即ち短日処理区4wでは、2回開花した。以上の結果からキクタニギクにおいても短日処理(4週間必要)で開花促進できることが判り、本年度の事業の目的は達成された。キクタニギクに短日処理を行う事で、開花の時期を人工的に制御し、現行の10月中旬以降から8月初旬へと早めることが可能になった。

そこで、本事業の成果を10月27日(日)午後に京都府立大学稻盛記念会館101・102室を使って、公開講座「キクタニギクの未来創造」で広く発信した。京都府立大学からは佐藤名誉教授が基調講演を行い、京都府立桂高等学校の生徒が短日処理栽培の結果について報告を行った。また、体験交流として高校生による高校における研究活動をポスターで発表し、室内にキクタニギクを展示し、キクタニギクの押し花入りしおりの作製、キク(食用菊)入り洋菓子とお茶の試飲食も行い、キクタニギクを広く広報した。これらイベントの内容についてアンケートを取り、今後の活動に役立つ様に集計を行った。

3.今後の活動について

キクタニギクを短日処理することで開花期間が制御可能になったので、京都由来の観賞用のキクとして重陽の節句を始めとしたキクのイベントなどに活用したい。また、食品利用が可能かどうかを検証するため、キクタニギクの花の成分分析を行い、食品原料にも利用して行きたい。

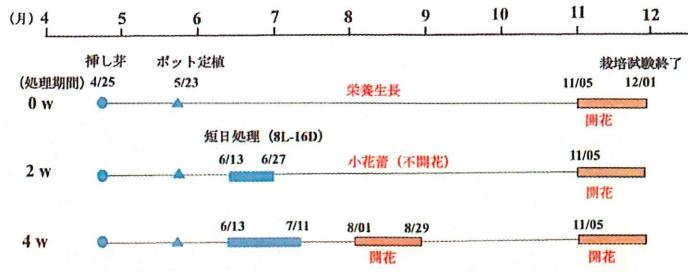


図1 キクタニギクの短日処理試験の経過



図2 短日処理区の開花状況
0 w (対照) 2 w 4 w
短日処理区



図3 公開講座ポスター



図4 公開講座 高校生による研究報告



図5 キクタニギク紹介パネル・花の展示



図6 食用菊入り洋菓子の試食



図7 高校生によるポスター発表